

中世小説「夢物語」についての考察

米田 明美
野見山 亜沙美
竹内 彩

『甲南女子大学大学院論集 第15号』（注1）で、翻刻と鑑賞本文を記した「夢物語」について、『論集』では紙面の都合上、詳しい考察には触れられなかったため、ここにその検討結果について報告したい。

「夢物語」は、個人蔵の未発表の中世小説で、古筆家の極札は「細川三斎」と極めるも、その自筆ではない。だが、その筆致から室町末期から江戸初期あたりの写本とみられる。内容は中世小説『あめわかみこ（天稚系）』とほぼ同じであるが、歌数及びその本文に至るまで、書写の伝本関係を見出せるほど類似した他の写本は見出せず、独自の本文をもつ。加えて書名「夢物語」という題も、他に同様の名を持つ本は見出せていない（注2）。加えて本書では「あめわかみこ」ではなく一貫して「あめわかみこ」であることも指摘できよう。ただ、特徴として、『風葉和歌集』に採歌されている散逸物語『夢ゆゑ物思ふ』の残存歌を二首と、詞書にある歌語を含む一首に近似する歌を有し、その改作本の系統であることは明確である。今回、同じ『夢ゆゑ物思ふ』と類似した和歌を含む慶応義塾図書館

館蔵本『雨わかみこ』（注3）と、東北大学図書館蔵本『あめわかみこ』（注4）を中心に比較検討し、本書がどのような特徴をもつのか考察を加えたい。

一、『夢ゆゑ物思ふ』との関係

『風葉和歌集』に採歌されている『夢ゆゑ物思ふ』物語歌は、次の三首である（注5）。

夢のやうにてよあよなみなれける人に今はかようにもえあるましきよし申て

哀とは思ひ出しや人しれぬ夢のかよひちちあとたえぬとも
（恋二一・八七六）

御かへし
中宮

これやさはかぎりなるらんうは玉のよなよなみえし夢のかよひち
（恋二一・八七七）

常葉院の御位のとときふちの花につけて心の松にかかる藤
なみと聞こえさせ給へる御かへし

夢ゆゑ物思ふの中宮

数ならぬ身には雲ぬの藤の花こころの松もいかかするへき

(雑一・一一八二)

それに対し本書の歌は、帝の歌として「人しれず今や今やとあふことを心の末にかかる藤波」(三丁裏)とある。「心の末」の「末」は「松」の意であろう。『風葉和歌集』(雑一・一一八一)歌の詞書中の常葉院の歌の一部「心の松にかかる藤なみ」と一致する。またこの歌に対する妹姫の返歌は、「数ならぬ身には雲井の桜花心のまつもかひやなからむ」(四丁表)とし、『風葉和歌集』歌は三句「藤の花」五句「いかがるへき」であるが、「夢物語」歌は「桜花」「かひやなからむ」と相違するものの、他はほぼ一致する。

次に『風葉和歌集』(恋一・八七七)歌に、類似する歌として妹姫の詠歌「これやさは限りなるべきむば玉の夜々みつる夢の通ひ路」(七丁表)が挙げられる。三句四句に少し相違は見られるものの、詠者に関しても後の中宮であり『夢ゆゑ物思ふ』物語歌の影響は見取れよう。またこの三首に関する類似歌については、既に勝保隆氏が慶応義塾図書館蔵本と東北大学図書館蔵本に収歌されていることを指摘され、詳細に分析されている。(注6)

二、和歌の比較

本書では、『夢ゆゑ物思ふ』歌と類似する二首を含む計十三首の歌が詠まれている。対して、東北大学図書館蔵本では十七首、慶応義塾図書館蔵本では十六首の歌が詠まれており、この二書は、本書よりも三、四首ほど多くの歌を有している。(本稿末尾の和歌一覧表参照)

三書の歌を比較してまずわかることは、本書の和歌十三首について、いずれも東北大学図書館蔵本と慶応義塾図書館蔵本とが類似歌を有していることである。この十三首は、多少語句や語順に相違は見られるが、歌意に大きな違いは見られない。特に、本書の九番目、十二番目の二首については、慶応義塾図書館蔵本のそれと一致している。また、この類似歌十三首の詠者及び歌が詠まれる順番についても、三書の間には齟齬は見られないことから、本書のすべての歌と二書の大抵の歌は、ほとんど一致していると言つてよいだろう。

次に、東北大学図書館蔵本と慶応義塾図書館蔵本の歌で、本書にはない歌を手掛かりに本書の特徴について考察してみたい。これらの歌が、どのような場面において詠まれているのかと言うと、①妹姫入内の宣旨があり、あめわかみこが去る場面、②誕生した若君を妹姫が見る場面、③若君出産の後、大臣宅に戻った妹姫があめわかみに逢えないことを嘆き悲しむ場面、④妹姫が新帝(東宮)の元へ入内したことを知った院(先帝)が、大臣に恨みをいう場面である。

① 場面について、本書では、妹姫入内の宣旨があつた夜にあめわかみこが現れ、恨みを言いつつ、自身があめわかみこであるかと名乗る。歌を詠みかわした後、あめわかみこは去つていき、妹姫は悲しみながら独り歌を詠む。「もしや」と思いあめわかみこを待つが来ることもなく、帝からまた手紙が送られてくるのである。一方で、東北大学図書館蔵本では、本書と同じような展開ではあるものの、あめわかみこが去つた後の妹姫の様子の詳細に記述され、その中で妹姫が「夢にたに見えこぬ人のうつりかの何とてふかく身にはしむらん」と詠

むのである。また、慶応義塾図書館蔵本では、少々違った展開がみられる。本書において、あめわかひこは妹姫のもとに姿を現し、すぐに自分があめわかひこであると述べたが、慶応義塾図書館蔵本では、去る直前に自身があめわかひこであることを明かしている。その正体を明かす言葉の末に、「うつゝにはおもかけはかりかへるともこゝろはきみにそふかともしき」と詠じ、去つていくのである。その後の妹姫の様子も、東北大学図書館蔵本とまではいかないが、本書よりは詳細に述べられている。このように、二書にいては詳細に描写されていたり、後に明かされたりする部分が、本書では簡潔に、早々に記述されており、描写や展開が簡略であるように見受けられる。

このことについては、②の場面においても、同様のことが言えよう。若君が誕生し、その若君を妹姫が見る場面である。東北大学図書館蔵本と慶応義塾図書館蔵本では、あめわかひこと瓜二つの若君を見て、妹姫は嘆き悲しみ、涙を流しながら歌を詠む。

「ひめきみ何となく御らんしやらせ給へは、「今、ちのなかにて、なんのいろめは見えねとも、かゝやくはかりにうつくしくわたらせ給ふ御かほつき、雨わか御子にちかひ給はぬ事のふしきさよ。」とおほしめして、御いきのしたにそおほしめしつゝけ給ふ。

夢ならばゆめにもやまてあさましや

こはいかなりしわすれかたみそ

御なみたもれ出給ふ。」

(東北大学図書館蔵本)

「なにとなくしりめに御らんしければ、たゞいまむまれおちて、なにのあやめもみゆましけれとも、たゞゆくゑなく、わかれしあ

めわかみこのかたちにかたかふ事そましまさぬ。ひめきみ、これを御らんして、

ゆめならばゆめにてやまてあさましや

こはいかなりしわすれかたみを

かやうにうちくちすさひたまひて、御なみたまつさきたちける。」

(慶応義塾図書館蔵本)

それに対し、本書では、

「さて姫君、若君を御覧するに、ありし夢人のかたち容貌にすこしもたがひ給はず。夢ならば夢にて果てもせで、よしなき忘れ形見かなと、いよいよゆかしくのみぞおぼしける。」

とあめわかひと違ふとことがない若君を見て「ゆかしく」思うのである。「夢ならば夢にて」「忘れ形見」という語句に、「ゆめならば」歌の要素が見受けられるが、二書に比べかなり簡潔に述べられていることがわかる。

また、③の場面で詠まれる「ことの葉を」の歌は、東北大学図書館蔵本にのみ見られるものである。そもそもこの場面自体、本書や慶応義塾図書館蔵本には見られないものであり、東北大学図書館蔵本が持つ独自本文の一つである。このことについては、勝俣隆氏によつて、「内容的には、古そうな印象があり、古態を伝えているものかどうか検討するに値しよう。」との指摘がされている(注7)。最後に、④の場面に見られる歌についてであるが、東北大学図書館蔵本と慶応義塾図書館蔵本と歌に異同がある。だが、いずれも院(先帝)が、大臣に恨みをいう場面で、院が大臣に送った歌である。これは本書には見られない場面で、詳しくは後述するが、本書と二

書において、結末部での展開が異なってくるため、本書には見出せないのである。

ここまで、三書の和歌を比較してきた。本書との伝本関係を見出せるほど近似した本文を持つ本は他になく、独自の本文をもつ「夢物語」ではあるが、和歌においては、本書の独自性は見受けられない。しかしながら、東北大学図書館蔵本と慶応義塾図書館蔵本にあって、本書が有していない和歌について比較していくと、二書に比べて本書では描写が簡易で簡潔であることがわかった。また、物語が進むにつれて、一書とは異なった展開を迎えることも本書の特徴であると言えるだろう。(竹内 彩)

三、軍記物語との関係

本書の特徴の一つとして、軍記物語によく見られる表現や、仏語が多用されていることが挙げられる。(前述『甲南女子大学大学院論集 第15号』鑑賞本文注釈を参照。)便宜上、軍記物語によく見られる表現を「軍記用語」、仏語を「仏教用語」と呼び、本書に見られる軍記用語を数点取り上げてみたい。

軍記物語に仏教用語が多く取り入れられていることは周知であるが、本書も同様の形を成していることは看過できない。例えば、我が子である若君を迎えにきたあめわかひこに対し、姫君は「我れ王土にありながら宣旨を背きひとり住む事、ただ君ゆゑばかり」と話しかける。ここで言う「王土」とは、帝が統治する国土のことを指しており、帝からの求婚を断つてまで独り身を貫いている姫君の一途な心を表わしている場面であるが、帝の治める国を「王土」と表現している例は決して多くない。前稿の注釈に挙げた『保元物語』

と『徒然草』、それ以外には『沙石集』と『太平記』に見られる程度である。

また、その姫君の言葉を受けたあめわかひこは、「生死無常、会者定離の理をよくよくおぼしめして御嘆きあり。かくてわがを下界におき医王に仕へぬ人やあるべき。十善の御身とは申せども、我が子を召し遣はれむ事は、さすがに憫なき御事なり。このついでにつれて上がるべし」と返す。ここに見られる「医王」は、仏や菩薩、または薬師如来を指す言葉であるが、この用例も『梁塵秘抄』に一例、『平家物語』に五例、『太平記』に九例と偏りがある。(注8)

その後、若君を連れ去られてしまい姫君は嘆き悲しむのだが、その美しさを耳にした帝は再度姫君の入内を望む。承諾の返事が来ないことに業を煮やした帝は、姫君の兄にあたる頭中将を呼び出し、父の大臣と姫君を説得しよう宣旨を下す。承った頭中将は、

「いかに、たしかに聞き給へ。人間に生をうくる身は必ず四つの恩を受くるなり。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。宣旨を背き給はば国王の恩、内裏へ参り給はずは父母の恩、我れをはじめ一門あまたの榮華をさまたげ給ふも衆生の恩、これらを背き給ひ、真の道に入り、浄土をねがい給ふとも、後生は無間のくるしみをうけ、多生曠劫はふるとも、若君に生まれあひ給ふ事あるべからず。」

と、「四つの恩」を挙げて姫君を説得する。この本文に類似する記述が、『平家物語』巻二「教訓状」に見られる。(注9)

「まづ世に四恩候。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩、是なり。其なかに尤も重きは朝恩なり。」

後白河法皇を軟禁しようと試みた平清盛を、嫡子の重盛が諫める場

面である。さらに、『源平盛衰記』の同場面にも(注10)、

「先世に四恩と云事あり、諸経の説相不同に、内外の存知各別也と云ども、且く心地観経を見候に、一には天地恩、二には国土恩、三には父母恩、四には衆生恩是也。以知之人倫とし、不知を以て鬼畜とす。其中に尤重きは朝恩也。普天之下、莫非王土、卒土之浜莫非王臣、されば彼潁川の水に耳を洗き、首陽山に蕨を折ける賢臣も、勅命の難背礼儀をば存とこそ承れ。」

とあり、本書を含めて、いずれも朝廷を疎かに扱うべきではないと説得する場面として共通している。(注11)

以上の三点から、本書には「軍記用語としての仏教用語」が多く取り入れられていることは明らかであるが、さらに本書は、『平家物語』を初めとした軍記物語の本文を下敷きとして取り入れている可能性も一考するべきであろう。(野見山 亜沙美)

四、「夢物語」の特徴

本書と慶応義塾図書館蔵本と東北大学図書館蔵本を比較すると、まずその本文の量に関し、本書は圧倒的に短いことを挙げなければなるまい。一面の字数や枚数を同様にするには困難であるが、慶応義塾図書館蔵本は一冊ではあるものの四一丁を有し、およそ一七〇〇字程度。東北大学図書館蔵本は大型奈良絵本三冊で、字数としてはおよそ二五〇〇〇字程度。それに対し本書は、一一〇〇〇字にも満たない。そのせいも、二書に比べて描写の簡略さが目立つ。冒頭部から最初の二〜三丁あたりはほぼ同一であるが、次第に梗概本的な傾向を持つ。当初親たちにも知られずあめわかひこと契りを結び、妹姫が帝からの入内の仰せの手紙に返歌したことに対し、あ

めわかひこが恨みを述べる場面で、本書では、

「いかにや、君、さしも我が申せし事も、みないたらになし給ふものかな。今は何をかつつみ参らすべき。君は昔、王にておはせしなり。我れは空のあめわかひこなり。その時契り深くして、御身下界に生まれ給へば、今かくあるべきことならねども、去年の秋、八月十五夜のことなりしに、琴の音のあまりにおもしろくたえがたきにひかれて、浮世の契りとなりぬ。されども、御身后にたち給ふべきに定まりぬれば、これより後参る事あるべからず。御なごりは数々惜しけれども、今申して帰るなり」(五丁裏〜六丁表)

と、自分はあめわかひこであるとすぐに名乗っている(本稿「二、和歌の比較」参照)。他の二書の本文を更に簡略にしているような文と言えよう。

加えて特に姉の大君に関する描写・登場場面は極端に少ない。姉がいることは冒頭部で語られているが、妹姫があめわかひこと通じたため、妹に代わって入内する。帝が美貌の評判高い妹姫と思い、入内した姉姫を垣間見する場面で、

「かくて内裏へ入らせ給へば、帝はよろこび限りなかりけり。灯火の白き光に御覧すれば、この聞こしめしたるごとくにもあらず、歳のころも二つ三つばかりはすぎておぼしめし、これをばいかなるものか、類あらじとは申しはじめけむ、と御心のうちにおぼしめしながら、…」

とある程度だが、慶応義塾図書館蔵本では

「御かくれて御らんするに、わさとせうきやうてんにつほねをたてられて此ありさまを御らんすれば、女はうたち八十よ人、さう

になみたちてさうにきちやうをさしかくし、かしつき入たてまつる。みかとはもしひしろくなりければ、御めもあへす御らんするに、きちやうのひまより御らんしければ、御くしはたけに二すんばかりあまりて、御たけすこしたはやかに、御くしのかゝりあら／＼しくそみえたりける。みかとは、『あなあさましや。なにと見えつる事そや。』とおほしめし、きちやうのうちになち入て御らんすれとも、きゝつるやうにはまします。」

と几帳の隙より垣間見た姉姫の器量を具体的に記述し、帝の懐疑的な心情に至る経緯を丁寧に描写している。東北大学図書館蔵本でも何度も父親が「御かたちおとり給へば」「いもうとにおとり給御かたち」と嘆き、帝の対面の場でも、

「いよ／＼御心もたへさせ給ひて、ゆかしくおほし、きちやうのはつれより、のそき給へは、御たけのほとすこしたかく、御くしは御たけに二しやくはかりあまりて、すこし御くしのかゝりあらかに、かねておほしめしつるにたかひたる心ちして、『ふしきや。されは日比聞し人なるにや。それかあらぬか。』とふしきにおほしめして、なをいそき御けんさんありて、それともおほしめすなをす御こともなし。」

とある。

だが何よりも大きな相違として特出すべき点は、慶応義塾図書館蔵本、東北大学図書館蔵本、そして室町時代物語大成の『雨若みこ』

(注12)も、帝に入内を勧められても応じず、結局姉を疎んじた帝ではなく東宮に入内していることである。慶応義塾図書館蔵本では、院となった帝は、新帝(東宮)がこの姉姫を寵愛するのを「いとくやしくそおほしける」とし、その後出家し修行に勤しみ、即身

成仏を遂げる。新院はそれを聞き「御かとにこのよし申たまへば、御いとおしくあはれにて、御なみたせきあへさせたまはず」と嘆く。その後帝との間に多くの皇子皇女を設け、夫の院の崩御後天からあめわかみことその間に生まれた子に迎えられ、昇天する。

ところが「夢物語」では、姉姫は帝と結婚し帝崩御後、あめわかひこやその忘れ形見との再会を願いつつも、往生を遂げている。姉姫があめわかひことの間に男児を生んだ後、帝がその美しい器量の噂を聞き、改めて姉姫の入内を望むのだが、姉姫の父大臣は躊躇し「姫もろとも真の道に入らむと思ふばかりなり。思ひよからず」と帝の使者である息子の頭中将に返答する。それを聞いた頭中将は、

「姫ばかり御子にてかく申す、中将は御子あらずや。うき世もの平等なるをば、親あまたの子を思ふがごとしとこそ申し候へ。我れをこそおぼしめさずとも、姫をおぼしめし候はば、后にた給ひ、雲井の御住まい、なにかおぼしめす御事の候べき。そのうへうき世をいとひ、真の道に入らせ給ふとも、王土にましましたながら宣旨を背き給ふべきか」

と帝の宣旨を背くことを憂い、親を説得する。またその後、中将は西の対に行き、姉姫の説得に赴く。姉姫はあめわかひこが忘れられず、承諾せず出家を願ひ出る。その姉姫を中将は、

「いかに、たしかに聞き給へ。人間に生をうくる身は必ず四つの恩を受くるなり。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。宣旨を背き給はば国王の恩、内裏へ参り給はずは父母の恩、我れをはじめ一門あまたの栄華をさまたげ給ふも衆生の恩、これらを背き給ひ、真の道に入り、浄土をねがい給ふとも、後生は無間のくるしみをうけ、多生曠劫はふるとも、若君に生まれあひ給

ふ事あるべからず」

と妹姫を説得する。この場面は、本稿「三、軍記物語との関係」で示したように、『平家物語』（巻二 教訓状）で重盛が清盛に諭す場面と類似している。この中将の説得の場面は、他本にはなく独自のものと言つてよい。何より「王土」「国王の恩」と天皇に対する畏敬の念が興味深い。その後説得に応じ妹姫は入内し、帝との間に多数の皇子皇女を産み、右大臣一族は繁栄する。後三十三年という年月が流れ、帝は崩御する。妹姫は女院となり、南殿で花を眺めていると、天から玉の御輿が下り迎えが来るが、女院に対し「御身は凡不夫にけがれ給へば、思ふにかひなし」と述べて、輿はそのまま天に戻る。そして巻末部分は、

「それより御心例ならず。ある日の暮れほどに往生をとげ給ふ。不思議の御事どもなりし。されば春の花は木末にかうばしくにほひ、四方に薫ずといへども、三七日に嵐に木末をかうばしくにほひ、なかなかりといへども、別離の雲にかくれやすし。たれかひとりとしてのこりとどまるべき、生死ままなるべきに、如来も末代の衆生のため、跋堤河のほとりにて涅槃をあらはし給ふ。電光朝露の理を知りねがふべきは、ただ後生なりけり。」

と、仏教用語を駆使しながらまとめられている。

まとめ

以上、主に三書を中心に比較したが、『夢ゆゑ物思ふ』歌と類似する和歌二首と詞書中の和歌の一部を含む三書であっても、本文や内容には大きな隔たりがある。歌を含むというだけで『夢ゆゑ物思ふ』に近いとは言えないであろう。

特に本書の「数ならぬ身には雲井の桜花心のまつもかひやなからむ」の姫君の歌であるが、この第二句「桜花」とすると、歌意は「物の数でない私といたしましては、宮中の桜花（妃）とのご要望に対し、お待ちになる甲斐などございませうか」と、「桜花」は帝の妃を暗示している。ただ帝の歌は、藤色の紙に歌をしたため「藤波」が詠み込まれているのに対し、藤花より季節が遡る「桜花」を返歌に示すのは上手な歌とは言えないであろう。「藤」と「松」は取り合わせとして詠まれる歌は多い（注13）が、「桜」と「松」の取り合わせの歌はほとんどない（注14）。だが帝は「帝、文御覧じて、あらうつくしの筆の跡、文字の並びやその姿もあらはれ、御心もいそがれ給へり」と感動している。

また『風葉和歌集』（雑一・一一八二）の詞書は、「常葉院の御位るとき」とあることからすると、物語中で院と帝が両立していたことを意味している。他本も、妹姫は姉を疎んじた帝ではなく新帝（東宮）の後となっており、本書「夢物語」とは相違している。

類似した内容の中世小説が多数存することからも、『夢ゆゑ物思ふ』の改作本は多数創作されたであろう。「夢物語」という書名や、類似する和歌を二首と詞書中の歌語一首を含んでいることから、『夢ゆゑ物思ふ』と関連がある可能性はあるものの、直接の改作本と言うよりも、改作本の梗概本あたりに相当するのではないだろうか。『夜の寝覚』の改作本である『中村本 夜の寝覚』のように、冒頭部はほぼ一致しているが、結末部はその改作期の時代の好みを察知し、異なっている点などはないだろうか。

「夢物語」の成立時期がいつとは見当はつかないものの、他本よりも軍記の用語や仏教用語が多い点などがその手がかりと言える

であろう。(米田 明美)

注

- 1、野見山亜沙美・竹内彩・北村麻里『夢物語』翻刻と鑑賞本文『甲南女子大学大学院論集 第15号』(二〇一七年 三月)。
- 2、『夢物語』という書名をもつものは、『国書総目録』に「寛文十年書籍目録」に仮名草子二冊とある。「二松学舎大学人文論集 14・15」(一九七八年十月・一九七九年三月)に小川武彦により翻刻されている同名の書のことと考えられるが、本書とは全く別内容である。
- 3、勝俣隆「慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』の翻刻及び解題」『新居浜工業高等専門学校紀要(人文科学編)』第一九卷 (一九八三年)。同「中世小説『あめわかみこ』の本文に関する一考察―慶応大学蔵『雨わかみこ』について―」『静岡大学人文学部国文談話会26』(一九八〇年二月)。
- 4、勝俣隆「東北大学附属図書館蔵『あめわかみこ』の翻刻と解題」『長崎大学教育学部人文科学研究報告』(一九八九年三月)。
- 5、『風葉和歌集』の本文は『新編国歌大観』による。
- 6、注3注4参照。
- 7、注4に同じ。
- 8、『義経記』や『全発句』には、「医王山」や「医王寺」のような地名や寺院名として例が見られる。
- 9、本文は『新編日本古典文学全集45 平家物語1(小学館 1994年)』から抜粋した。
- 10、『源平盛衰記』国民文庫刊行会 1910年

- 11、前述した「王土」も同様に認められる。また、一四丁裏の「車を一条へとばせらるる」という表現も、『平家物語』巻二の同場面に見られることも同時に指摘しておきたい。
- 12、横山重・松本隆信「雨若みこ(寛永写本) 赤木文庫蔵」『室町時代物語大成 第二』(一九六九年二月 角川書店)。
- 13、辛島正雄「あめわかみこ往還―御伽草子『あめわかみこ』とその源流―」『説話論集 第八集 絵巻・室町物語と説話』(一九七五年三月 清文堂出版)。
- 14、「守覚法親王集」一首のみである。

【和歌一覽表】

		『夢物語』		東北大学付属図書館蔵『あめわかみこ』		慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』	
①	くまもなき月のひかりにさそはれて空になりゆくわかこゝろかな	くまもなき月のなこりにさそはれて心は空になりけるかな	くまもなき月のひかりにさそはれてこゝろはそらになりけるかな	⑧	是やさはかきりなるへきむは玉の夜／＼みつる夢のかよひち	これやさはかきりなるらんむは玉のよる／＼かよふ夢のかよひち	これやさはかきりなるらんむはたまのよな／＼みゆるゆめのかよひち
②	いにしへのちきりもふかしこの世にて二たひ君にめぐりあひけり	いにしへのちきりもふかし此世にてふたたひきみにめぐりあひぬる	いにしへのちきりもふかしこのよにてふたゝひきみにめぐりあひぬる	⑦	なにせむとわすれかたみののこるらむいとゝしのふの露のしけきに	なにしにかわすれかたみをのこす覽いとゝしのふのつゆのしけきに	なにしせんわすれかたみののこるらむいとゝしのふはつゆのしけきに
③	いにしへのちきりはしらすこの世にてかゝるうききめにたれかあふへき	いにしへのちきりはしらし此世にてかゝるうきめのうちゑしらしな	いにしへのちきりはしらすこのよにてかくうきことのゆくゑあらしを	⑥	わするなよしのふのふしは露けきと見はてぬ夢ののこるかたみを	わするなよしの草のつゆけくと見はてぬ夢のかたみともみよ	わするなよしのふのくさのつゆけくと見はてぬゆめのかたみともせよ
④	人しれすいまや／＼とあふことを心のすゑにかゝるふしなみ	人しれすいまや／＼とあふさかのこゝろのまつにかゝるふしなみ	人しれすいまや／＼とあふ事のこゝろのまつにかゝるふちなみ	⑤	かすならぬ身にはくもゐのさくら花心のまつもかいやなからむ	かすならぬ身にはおもひのふしの花まつふくうらにかいやなからん	かすならぬ身には雲井のふちの花こゝろのまつもかひやなからん

										『夢物語』	
		⑬ 夢にのみおもひたとりてやみしみのけふあらはるゝすかたともみよ	⑫ あまの川いかにちきりしなかなれは年に一たひあふせなるらむ			⑪ なにかさてくれまつほとをなけくへきあけたにはてゝかへる心に	⑩ あひみてはうれしかるへき今朝なれと暮まつほとそくるしかりける	⑨ かたらはむことをいそくにほとゝきすおもはぬ枝にしのひねやなく		東北大学付属図書館蔵『あめわかみこ』	
	うらめしやなとおとつれのなかるらんこはなに事になれる我身そ	夢とのみおもひてきりのすき枕けふあらはるゝすかたとも見よ	天川いかにちきれるなかなれはとしに一度あふせなる覽	ことの葉をさそふあらしにしらせはやわれも此世にあればつる身を	夢ならばゆめにもやまであさましやこはいかなりしわすれかたみそ	なにかそのくれまつ程をなけくへき明たにはてゝかへるこゝろに	あひみてはうれしかるへきけさなれとくれまつほとそくるしかりけり	かたらはんことをはいそくに時鳥をもはぬかたにしのひねやなく			
あふにこそ身をかふなれはいたつらにこはなに事になれるわか身そ		ゆめとのみおもひたとりてやみにしにけふあらはるゝすかたをもみよ	あまの川いかにちきりしなかなれはとしに一たひあふせなるらん		ゆめならばゆめにてやまであさましやこはいかなりしわすれかたみを	なにかそのくれまつほとをなけくへきあけたにはてゝかへるこゝろに	あひみてはうれしかるへきけさなれはくれまつほとそくるしかりける	かたらはん事をいそくにほとゝきすおもはぬえたにしのひねやなく	うつゝにはおもかけはかりかへるともこゝろはきみにそふかともしき	慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』	